

《無伴奏ヴァイオリンのソナタとパルティータ BWV1001～1006》の成立

《無伴奏ヴァイオリンのソナタとパルティータ BWV1001～1006》は、1 艇のヴァイオリンのみによって、ポリフォニックな表現の可能性を追求した曲集。バッハ音楽の真髄を示す作品として、高く評価されている。

自筆譜の表紙には次のようなタイトルが記されている。

Sei Solo. / a / Violino / senza / Basso/accompagnato./Libro Primo./da/Joh: Seb: Bach./ao 1720.

通奏低音伴奏なしのヴァイオリンのための 6 つの独奏曲 第 1 巻 J.S.バッハ作 1720 年

[画像略]

[Sonaten und Partiten für Violine allein(A04-709)]

しかしこの楽譜は浄書であるため、作品の成立は、1720 年以前にさかのぼると見なくてはならない。

バッハがこうした美しい浄書譜を誰に献呈しようとしたのか、また、そもそもバッハがどの奏者を想定してこうした高度な技巧を要求する作品を書いたのかは、依然として謎である。[バッハ事典：礪山雅ほか監修(WR03-642)]

《無伴奏ヴァイオリンのソナタとパルティータ》の自筆浄書譜

《無伴奏ヴァイオリン・ソナタ 第 1 番 ト短調》第 1 楽章冒頭（ベルリン国立図書館所蔵）

[画像略]

[Sonaten und Partiten für Violine allein(A04-709)]

浄書譜とは？

バッハの自筆譜は機能上および美的観点から、草稿譜と浄書譜の二つに類別される。作曲の際に速筆で書き下ろされた草稿譜は、体裁上の美しさや読みやすさに留意しない書体を示し、通常推敲による多くの訂正箇所を含む。それに対して、浄書譜(もしくは清書譜)は草稿譜を丁寧に書き写して仕上げられた美しい書体の楽譜である。[バッハとの対話 (WR03-923)]

J. S. バッハの周辺で活動していたヴァイオリン奏者たち

バッハは、もともとチェンバロやオルガンのような鍵盤楽器ばかりでなく、ヴァイオリンの演奏にもすぐれていて、ヴァイマルの宮廷に就職したときも、ヴァイオリンを演奏することが義務付けられていた。そうしたバッハがヴァイオリン音楽に目を向けていたのは当然と言える。

[J.S.バッハ【作曲家別名曲解説ライブラリー】(WR03-785)]

ヨーハン・パウル・フォン・ヴェストホフ (Westhoff, Johann Paul von 1656-1705)

ドイツの作曲家、ヴァイオリン奏者。1674-97 年、ドレースデン宮廷楽団員をつとめ、かたわら、ヴァイオリンの名手としてイタリア、フランス、オーストリア、イギリスなどヨーロッパ中を演奏旅行し、高い評価を得た。

1699 年以来、彼はヴァイマル宮廷書記官、宮廷楽団監督をつとめ、18 歳のバッハがヴァイオリン奏者として数カ月ヴァイマルに滞在したときも、まだ健在だった。彼の独奏ヴァイオリンのための組曲には、多声的な演奏を行うあらゆる技術が集約されており、**A.モーザーは彼を、バッハ以前の多声的ヴァイオリン音楽の最大の巨匠とみなしている。**

ヨーハン・ゲオルク・ピゼンデル (Pisendel, Johann Georg 1687-1755)

ドイツのヴァイオリン奏者、作曲家。アンスバハの宮廷礼拝堂に少年聖歌隊員として入り、ピストツキに歌、トレッリにヴァイオリンを学び、16 歳で同宮廷楽団のヴァイオリン奏者となった。

1709 年にライプツィヒに赴き、同地の大学で学ぶとともに、コレーギウム・ミュージクムとの演奏活動も行った。なおライプツィヒに向かう途中、ヴァイマルでバッハを訪れている。12 年ドレースデン宮廷楽団にヴァイオリン奏者として雇用され、28 年のヴォルフェムビエの死後は楽師長の任務を引き継ぎ、30 年に正式にその地位に就いた。

ピゼンデルはバッハ時代の第一級のヴァイオリン奏者であり、ヴィヴァルディ、アルビノーニ、テレーマンなどの有名な作曲家が彼に作品を献げている。**彼の無伴奏ヴァイオリン・ソナータは、バッハの無伴奏ヴァイオリンのための音楽にも影響を与えたと考えられる。**

クリスティアン・フェルディナント・アーベル (Abel, Christian Ferdinand 1683-1737)

ヴァイオリン奏者、ヴィオラ・ダ・ガンバ奏者として 1715 年ごろからケーテン宮廷につとめていた。バッハが 17 年にその宮廷楽長となって以来、2 人は親交を結び、20 年にアーベルの娘が誕生した際には、バッハが代父をつとめている。

[バッハ事典：角倉一朗監修(WR03-808)]

バッハ以前の無伴奏ヴァイオリン曲

バッハの《無伴奏ヴァイオリン曲》は、この種の作品として決して最初のもので唯一のものでもない。17 世紀には、多くの卓越したヴァイオリンのヴィルトゥオーゾが同様の作品を書いていた。

おそらくそれらのなかで最も有名なものは、パウル・ヴェストホフとヨハン・ヤーコプ・ヴァルターの作品、およびザルツブルクのヴァイオリン奏者ハインリヒ・イグナーツ・フランツ・ビーバーの、いわゆる《ロザリオのソナタ》だろう。これらの作品は高度な音楽的内容および演奏至難という点で、バッハの《無伴奏ヴァイオリン曲》にほぼ匹敵する。

【室内楽曲【バッハ全集 第 13 巻】(CD 解説) (CD09-585)]

曲の構成

曲集は、整然としたプランのもとに配列されている。すなわち 3 曲の「ソナタ」と 3 曲の「パルティータ」が交互に配置され、前半 4 曲が短調、後半 2 曲が長調で書かれているのである。

「ソナタ」は、イタリア風の「教会ソナタ」様式に基づく、峻厳な音楽。緩 - 急 - 緩 - 急の 4 つの楽章をもち、第 2 楽章はフーガとなって、先行する楽章との間に、オルガン的な「プレリュードとフーガ」の対応を作り出す。第 3 楽章は、コンチェルトの緩徐楽章に類比される「伴奏付きカンタービレ」。フィナーレでは、速いパッセージ・ワークが駆使される。

一方「パルティータ」は、舞曲を連ねたフランス風の組曲様式をベースにしている。その意味でこれは《無伴奏チェロ組曲》の世界に近いが、構成はいつそう自由で、各曲の個性も鮮明である。[バッハ事典:磯山雅ほか監修(WR03-642)]

<ソナタ>

	1	2	3	4
ソナタ第 1 番 ト短調 BWV1001	アダージョ Adagio	フーガ (Fuga) Allegro	シチリアーナ Siciliana	プレスト Presto
ソナタ第 2 番 イ短調 BWV1003	グラーヴェ Grave	フーガ Fuga	アンダンテ Andante	アレグロ Allegro
ソナタ第 3 番 ハ長調 BWV1005	アダージョ Adagio	フーガ Fuga Alla breve	ラルゴ Largo	アレグロ Allegro assai

<パルティータ>

	1	2	3	4	5	6	7
パルティータ第 1 番 ロ短調 BWV1002	アルマンド Allemanda	コッレンテ Corrente	サラバンド Sarabande	テンポ・ディ・ボレア Tempo di Borea			
	ドゥーブル Double	プレスト (Double) Presto	ドゥーブル Double	ドゥーブル Double			
パルティータ第 2 番 ニ短調 BWV1004	アルマンド Allemanda	コッレンテ Corrente	サラバンド Sarabande	ジーク Giga	シャコンヌ Ciaccona		
パルティータ第 3 番 ホ長調 BWV1006	前奏曲 Preludio	ルール Loure	ロンド形式の ガヴォット Gavotte en Rondeaux	メヌエット I Menuet I	メヌエット II Menuet II	ブーレ Bourée	ジーク Gigue

バッハ自身による編曲

バッハは6曲の《無伴奏ソナータとパルティータ》で、ヴァイオリンという楽器のもつ、ありとあらゆる可能性を汲み尽した。すなわち、演奏可能なあらゆる和音を弾かせることはもちろん、3声、4声のフーガの演奏さえ求めているのである。むろん、いくらヴァイオリンに重音奏法が可能であるとはいっても、和声進行や対位法を完全に具現することはできない。したがって各曲には、別の楽器によって顕在化されるような、さまざまな要素が潜んでいることにもなる。

実際、バッハは、これら《ソナータとパルティータ》のじつに色々な部分を、他の楽器のために編曲・転用した。例えば、イ短調ソナータはチェンバロ用のソナータ BWV964 に、ホ長調パルティータはリュート用 BWV1006a に全曲編曲され、さらに同パルティータの前奏曲は、カンタータ BWV29、120a の序曲として用いられている。

[バッハ事典：角倉一朗監修(WR03-808)]

[画像略]

《パルティータ 1006a》冒頭

[Opere per liuto (C02-003)]

[画像略]

カンタータ第29番《神よ、我ら汝に感謝す》冒頭

[Ratswahlkantaten (C23-044)]

後世の作曲家による編曲

《無伴奏ヴァイオリン・ソナタとパルティータ》には自筆譜の他に多くの筆写譜が存在し、バッハの生前からひろく知られていた。

その一部が初めて印刷されたのはパリ・オペラ座のヴァイオリン奏者**カルティエ**が 1789 年に出版した《ヴァイオリンの技法》においてだった。

その後、ボンの**ジムロック**(1802 年)やライプツィヒの**キストナー**(1842 年・ダヴィット校訂)など次々と印刷譜が出版された。しかし、それらはバッハ自身の自筆譜の発見が遅れたために、第三者による筆写譜に基づいていた。

[小特集 バッハ”無伴奏”の世界、那須田務、『音楽現代』、2000 年 8 月(ZA18-011)]

[画像略]

[ヴァイオリンの技法(C20-190)]

19 世紀のはじめに楽譜が印刷されたことは、この作品の歴史に新しい展開をもたらした。

メンデルスゾーンの有名なバイオリン協奏曲の初演を受けもったことでも知られている**フェルディナント・ダーフィット** Ferdinand David(1810-1873)は、すでにライプツィヒのヴァイオリン界の中心的存在であった。このダーフィットは 1840 年 5 月、ゲヴァントハウス音楽協会主催のコンサートで、親友メンデルスゾーンの伴奏でこの「ソナタとパルティータ」の一部分を演奏した。

メンデルスゾーンも後に自作の伴奏をつけた版を出版している。

このコンサートを聴いていた**ローベルト・シューマン**は、メンデルスゾーンの伴奏によってこの曲は楽しく聞けるものになった、とこの方向を支持したばかりか、1854 年には 6 曲すべてにピアノ伴奏をつけた版を刊行している。

[無伴奏ヴァイオリン・ソナタ&パルティータ(CD 解説) (CD07-177)]

[画像略]

《パルティータ第 2 番》シャコンヌの冒頭。

2 段目がシューマンによる伴奏、下段がメンデルスゾーンによる伴奏

[Chaconne für Violine solo (D01-948)]

この作品の性格を再認識したのは、ダーフィットの弟子でブラームスの親友の名ヴァイオリン奏者
ヨーゼフ・ヨアヒム Joseph Joachim(1831-1907)であった。

まだ13歳にすぎなかったとはいえ比類ない演奏技巧の持ち主になっていたヨアヒムは、1844年のコンサートでこの作品を演奏し、のちにシューマンのピアノ伴奏付きの楽譜が出版されても、無伴奏で演奏するヨアヒムの方針は変わらなかったという。

このヨアヒムは、晩年になって、偶然の機会からバッハの自筆楽譜に出会った。この楽譜の所有者はバッハ研究家として知られたルストの未亡人で、彼女はボンでこの楽譜を保管していた。ヨアヒムはこの楽譜を底本にした校訂楽譜の準備にとりかかり、それは彼の死後 1908 年に出版された。

なお自筆楽譜は 1890 年ブラームスと彼の友人の間で購入計画がたてられたが結局実現せず、現在はベルリンの図書館に所蔵されている。

演奏と校訂出版の両面にわたるヨアヒムの貢献によって、「無伴奏ヴァイオリンのソナタとパルティータ」は、はじめてそれ自体で完結した、自立する作品として広く知られるようになり、今日まで多くのヴァイオリニストにとって最高の課題となりつづけているのである。

[無伴奏ヴァイオリン・ソナタ&パルティータ(CD 解説)(CD07-177)]

[画像略]

《ソナタ第1番》冒頭 ヨアヒム&モーザ版(C91-703)

様々な編曲版



ブゾーニ版 表紙(C00-658)

さらに後世の人たちも、色々と編曲している。まず、**ラフマニノフ**は、その[BWV1006の]プレリュード、ガヴョットおよびジグをピアノ独奏用に編曲している。また、**ストコフスキー**はプレリュードをオーケストラ用に、**クライスラー**はガヴョットをヴァイオリンとピアノ用にそれぞれ編曲している。

バッハに心酔していたピアニストで作曲家の**ブゾーニ**(Ferruccio Benvenuto Busoni 1866-1924)は、これ[BWV1004のシャコンヌ]をピアノ独奏用に編曲した。また**ブラームス**は、このヴァイオリン曲を左手のみのピアノ曲に編曲した。
[J.S.バッハ【作曲家別名曲解説ライブラリー】](WR03-785)]